

第Ⅵ章 高野山の歴史と子院の変遷

はじめに

高野山の歴史は、弘仁7年(816)弘法大師空海によって密教修禪の地として開創されたことに始まる。以来、密教修禪の道場として密教寺院の建設、弘法大師信仰や弥勒浄土信仰・阿弥陀浄土信仰が複合的に融合しあって、全国を風靡した高野山霊場信仰に基づく貴紳者の堂塔建設や高野聖による庵や寺院建設など、高野山の12世紀にわたる歴史の流れの中で幾多の寺院が山内に建設された。平安末期の頃には山内の各谷筋の奥にまで高野聖の庵や寺院が建設され、ほぼ現在みられる山内の状況に近い状態にまで発展をしていたようであるとされる。

しかし、山上仏教都市の宿命でもあるが、堂塔への落雷により大火災となって大多数の寺院が焼失するという惨事が記録によると11度に及んだといわれている。まさに高野山の歴史は火災とともに歩んできた歴史ともいえよう。しかも長い時の流れの中で失われた記録も多く、必ずしも塔頭子院の開基時期が明確でない子院も多い。このような事情もあってか、天保10年(1839)に編纂された『紀伊續風土記』においても、開創以来の寺院数について、「諸谷の別所私庵等を相併せは幾千區なるや古代の分野基布縦横して實に算計しかたく又その轉換廢立せるに至ては桑海陵谷の變態ありて一概に辨別すへからず」と記述している。

山内各所は寺院の遺跡が幾層にも重なり、掘削中に焼土跡が確認されることも多い。まさに高野山の地中は、高野山の歴史が秘められた一大遺跡といっても過言でない状況にある。ましてや、多くの子院は開基当時の場所にあるとは限らず、たびたび移動しており時代時代の所在を突き止めることは、記録の散逸や焼失もあって不可能である。故に、ここでは高野山の概略の歴史の流れをみながら子院の歩みを大観し略記するにとどめたい。

1 草創期と子院

高野山は、弘法大師空海によって真言密教の理想を実修する修禪の地、また、大師自身の入定の地とする目的によって弘仁7年(816)に朝廷に願い出て下賜された真言密教実践を目的に開創された山である。

大師の上表にたいし朝廷の勅許が下されるや、大師は実恵や円明等の諸弟子を高野山に派遣され伽藍建立事業に着手されている。大師自身も弘仁9年(818)秋には登山され事業の指揮を取られたようだが、弘仁14年(823)東寺別当に任じられ、その経営を命じられるなど世事が多く諸弟子に建設をまかされていたようである。大師が本格的に建設事業に力を注がれたのは、天長9年(832)に京都高雄の地を去って高野山に居を移されて以降のことと思われる。

大師構想のもとで進められた高野山金剛峯寺の伽藍は、奈良時代寺院とは全く異なった伽藍配置を持ったもので、毘盧遮那法界体性2基(大塔・西塔)を左右に配し、講堂(現金堂)をその中心前方に建立するという密教独自の理論に基づく伽藍建立を計画された。またその2基の塔形式も新しいインドの

塔形式を強く残した多宝塔形式の塔が計画されるなど、金剛峯寺伽藍は雄大な構想を持って計画されたものと考えられる。

大師の高野山金剛峯寺建立は、私寺としての建設であったため、国からの援助は得られず、広く人々からの勧進に依らなければならなかったもようで、承和元年（834）8月の造塔知識文（『性霊集』巻8）に「一銭一粒のものを添へて、斯の功德を相済へ」と諸々の檀越に対して援助を願われている。困窮する経済状態並びに都を遠く離れた紀伊山中の深山幽谷地での建設という立地条件も重なって、その建設事業は大師の意志にかかわらず遅々として進まなかったようである。

高野山の経営を甥の真然に託して大師が入定された承和2年（835）ごろに完成していた建物は、『金剛峯寺建立修行縁起』によれば、16丈の多宝塔1基（大塔）、講堂（金堂）、僧坊が建立されていたに過ぎなかったとし、高野山二世真然僧正の代になって真言堂2宇、9丈の多宝塔（西塔）、鐘堂、経蔵、食堂、中門等の堂塔が建立された旨を伝えている。

しかし『金剛峯寺建立修行縁起』が伝える16丈の多宝塔が、大師入定時に完成していたかは不明である。なぜならば、大師入定後に一番弟子の東寺長者実恵が、再三にわたり高野山の造塔修理工料等を上奏していることや真然大徳の上奏によって貞観3年（861）に大塔修理工料として紀伊国正税稻4,900束を、翌年にも不足分として稻2,000束を追加して下賜されている状況からみて、大塔が竣工をしていた可能性が少なく、大師の後を継いだ高野山二世真然大徳によって完成をみたようである。

高野山二世真然大徳は、若干30歳で未完成の高野山金剛峯寺の経営を大師より委ねられた。高野山金剛峯寺は、大師が入定される直前の承和2年（835）2月によりやく定額寺の勅許を得、国の保護援助を受ける立場を得たものの、紀伊国司が金剛峯寺別当を兼ね、国司の管理下にあつて定額寺としての保証もない状態であった。収入としては、かろうじて承和2年（835）正月に設置許可を得ていた年度者試度の修繕料米10石と油1石の定められた収入しかなく、それ以外には、東寺で執行される後七日御修法出仕僧得分収入のみで、それらの収入の一部を修理費や雑費に充当するという極めて苦しい経済状態にあり、伽藍建立の進展は極めて遅々たるもので、現状維持が精一杯の状況であったと言われている。

このような高野山の窮状に対して、東寺長者実恵が承和8年（841）燈明料にも事欠く事情を朝廷に訴え、他の定額寺に準じて燈分ならびに供養仏餉二座料を施されんことを請い、燈分料、仏餉料2,800束と金剛峯寺料として5,616束の稻がよりやく支給されることになった。実恵僧正の援助を得ながら高野山二世真然大徳によって伽藍建設が進められていたが、その建設事業の進展は相変わらず遅々たるものであったようである。

高野山の伽藍建立に対し惜しみない助力をされていた実恵僧正が62歳で入寂された承和14年（847）年に中門の落慶をみたようであるが、その後、貞観3年（861）真然大徳が紀伊国税の稻4,500束を大塔修理工料として賜るまでの16年間は、ほとんど国からの目立った援助はなかったようである。

また、翌貞観4年（862）稻2,000束を大塔修理工料として再度朝廷より下賜されている。貞観18年（876）には伊都・那賀・牟婁・名草の四郡に散在する38町歩が不輸租田として認められ、高野山最初の寺領が確保されるなど経済的好転にともない、貞観年間には伽藍建設も軌道に乗ってきたものと思われる。このように朝廷からの援助を獲得しうる状態にこぎつけるには、真然大徳の血のにじむような努力の賜物であるが、実恵入寂後に東寺長者となった真然大徳の師、真雅僧正の朝廷への働きかけが背景にあった

のではないかと考えられるが、記録は伝わっていない。

東寺長者真雅僧正が入寂した元慶3年(879)以降、真然大徳は東寺長者を歴任した。真然大徳の80歳代には朝野の信望もあつまり、高野山の伽藍建設も急速に進展をみせ、真言堂、准胝堂、西塔などの諸堂が順調に建立され、仁和3年(887)ごろには伽藍諸堂の完成をみた。開創以来実に70有余年の歳月を要して伽藍諸堂に葺が聳え、大師の壮大な計画に基づく高野山金剛峯寺の伽藍が完成した。

伽藍諸堂の整備を終えた真然大徳は、仁和5年(889)に弟子寿長を初代金剛峯寺座主職に就け、また座主については真然大徳直系の高野山止住僧をもって充てることを定め、寛平3年(891)に入寂した。ようやく基礎の整った高野山であったが、第四世無空の時代に、真然大徳が東寺より借覧していた宗宝の『三十帖策子』の返却問題が起きた。座主無空は返却を拒絶して延喜16年(916)に策子を携え一山の僧を率いて下山したため、山上にはほとんど人影が認められないという荒廃状態がおとずれた。

『三十帖策子』は、延喜18年(918)6月に伊賀蓮台寺で無空が寂したことにより、翌延喜19年東寺に返納され借覧返納事件は落着いた。しかし高野山の荒廃が著しいこともあって、東寺長者観賢は金剛峯寺座主を兼務し、座主不在となった高野山に正別当を設けて管理にあたらせた。正別当には、真然大徳と観賢僧正の共通の弟子である峰禅が任じられ、東寺の配下に入るようになった高野山への融和策が講じられた。さらに観賢僧正は、宗祖空海に大師号の諡号を得るため朝廷に上表を行った。

この上表にたいして延喜21年(921)に醍醐天皇より「弘法大師」の諡号が贈られ、10月27日に勅使と観賢僧正が檜皮色装束と大師諡号を持って奥院に参拝し、大師の御入定されている御姿を拝し、大師の衣を着せ奉った。これ以来、御衣替の行事が続けられることになった。この頃より大師が奥院の靈窟に入定され、今なお留身されて衆生救済教化活動をされているとする弘法大師入定信仰が世に広まった。また、大師は禅定に入って、五十六億七千万年後に弥勒如来が下生され説法されるのを待ちつつ、一切衆生の救済したもう不滅の仏であるとの思想が普及し、聖地高野山から信仰の靈山高野山へと信仰の形態を変える重要な時期でもあった。

天暦6年(952)奥院大師廟塔が雷火によって焼失したが、和泉講師雅真によって復興された。雅真は復興事業にさきがけて、御廟の左に丹生・高野両社を創祀した。また雅真は大塔修理工料や年分度者の復活を計り、准胝悔過法会の再興に努めた。しかし、正暦5年(994)7月6日、落雷によって御影堂を除く壇上の伽藍諸堂が焼失し、高野山は重大な危機に直面することになり2度目の衰退を招くことになった。この危機に対し初代検校となった雅真は山麓天野社に避難して曼荼羅院を臨時の僧坊とし、東寺長者寛朝を通じて藤原道長の姉東三条院詮子から天野近辺の6カ郷の庄園の寄進を受け天野社領とした。長徳4年(998)俗別当紀伊国司大江景理を奉行として高野山の復興事業が着手されることになったが、寛朝、雅真、詮子が相次いで没したことや、国司景理の非協力的な態度もてつだって復興事業は挫折した。

草創期の子院

草創期の高野山の歴史は苦難の連続であったと言っても過言ではない。草創期の苦難の道を歩み始めた高野山にはいかにどの塔頭寺院が建立されたのであろうか。確実な史料が伝わっておらず、『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図や後世の文献史料に頼らざるを得ない。それらの史料にあっても塔頭寺院の開基

人物や創建時期に相違がみられるものがあるが、にわかには信じがたい面を持っているが、次ぎにその様子を概観してみたい。

『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図には、御影堂の後方に僧坊が描かれている。さらに大塔の東方に東南院、北東に中院の2院が描かれている。康保5年(968)の作とされる『金剛峯寺建立修行縁起』には伽藍諸堂の記述の中に「二十一間僧坊一字」とあり、『金剛峯寺根本縁起』所収の絵図に描かれている僧坊に当たるものと思われる。『金剛峯寺根本縁起』の絵図に描かれている東南院は、弘法大師空海の十六弟子の一人である智泉の開基と伝えられる僧院で、天長2年(825)に伽藍建設事業に従事していた智泉が37歳で東南院において寂したことを伝える記述が『性霊集』にあり、大師の住坊とされる中院とともに、高野山にあって最も早く建立された子院であったと思われる。また、東南院は『金剛峯寺根本縁起』や『金剛峯寺建立修行縁起』が伝える僧坊の完成以前には、建設事業に従事していた諸弟子の住坊であり、建設事務所的役割を持った僧院であったかもしれない。大師住坊の中院、智泉開基とする東南院の存在した地域は本中院谷とされるが、この谷には十大弟子の真如親王開基とする遍明院や親王院が建立されたようで、山上で最も早く開かれた地域であった。

後世の史料である『諸院家帳』や『紀伊續風土記』等の伝える子院の開基年次を参考に開創された弘仁7年(816)から10世紀末までのおよそ180年間に、伽藍を中心として壇上のすぐ北の中院を中心とした本中院谷地域から隣接する北西の谷上院谷、西方の西院谷、南方の南谷に子院が建立されていったものと考えられる。その位置も伽藍とあまり離れることのない位置に建立されていったようである。子院数も20箇院を下回る程度であったようであるが、諸史料で開基僧名の相違がみられるなどがあり、どの程度の建立がみられたかは今後の発掘調査による結果をもとに考察する必要があるだろう。

2 中興期と子院

10世紀末の復興事業の挫折で荒廃をよぎなくされていた高野山も、11世紀に入ると本格的な復興が行われることになった。その復興事業の口火を切った人物は祈親上人定誉であった。祈親上人は、興福寺系の持経者でかつ密教僧の小島真興に師事し、仙敎に灌頂を受けるなど密教的色彩の強い観進僧であったといわれる。その祈親上人が長谷寺参籠中に夢告を受けて長和5年(1016)に来山し、高野山の再興を奥院大師廟に誓い、祈誓の鑽火をともした。この際にともされた燈火を持経燈といい、一名貧女の一燈といわれる燈火の起こりになったといわれる。

祈親上人定誉は、厳冬中に在山しうよう暖房施設である土室を僧院に造るなど工夫をおこない、天野に避難している住僧に冬期住山を勧め、寛仁元年(1017)に初めて御影堂で彼岸会を行った。祈親上人の行為は、高野山の住僧にも力を得させることとなり、行明や興胤等によって本格的な復興事業が開始されることになった。この頃、祈親上人は東室、行明は北室、興胤は西室の僧坊を建立したといわれる。

治安3年(1023)10月、東寺長者仁海によって勧誘された高野浄土観に応じ、藤原道長が高野山に来山した。道長は金泥法華経と自筆の墨書理趣経30巻を奥院御廟前で供したのち埋納し、兜率浄土往生を祈り、政所河南の地(慈尊院付近の紀の川南岸の地)を寄進した。道長の高野参詣後は天皇や貴族の参詣が相次ぎ、道長の先例に習って山上での法要や庄園の寄進が行われた。万寿3年(1026)には、藤原

道長の娘上東門院彰子が落飾後に大師廟前に納髪を行った。この彰子の行為は、高野山の納髪納経の最古の例といわれる。永承3年（1048）10月に道長の子藤原頼通が参詣し、道長の前例に従い金泥法華経1巻と墨書理趣経30巻を大師廟前に埋納し、政所河北の地を寄進した。こうした摂関家の高野参詣及び庄園の寄進は、高野山復興に活力を与え、また都から遠く離れた地方的な高野山を一挙に天下の霊場としての地位を与えることになった。しかし当時の高野山の院宇は、僅か16宇に過ぎなかったといわれる。

復興事業が徐々に進展をみることにより、高野山の教学面にも刺激を与えることになったようで、中院流の祖となった明算が長久元年（1040）に中院を再興した。明算は仁海の弟子成尊から小野流を学び、延久4年（1072）に帰山して中院流を開いた。また帰山後の明算は、祈親上人の遺言を継いで堂宇の建設にも尽力し、昼夜不断の理趣三昧会や尊勝陀羅尼会を興すなど高野山の復興に尽くした。

延久4年（1072）には大御室性信（三条院皇子）が来山し、奥院御廟の川北に庵を構えて参籠した。また性信親王は、伽藍壇上に灌頂院を造営されようとされたが、完成前に崩御された。性信親王の遺命によって灌頂院の建設が進められ、応徳3年（1086）春秋二季の灌頂が始められて阿闍梨三口が置かれた。性信親王の来山参籠は、事相面で広沢流導入の契機となり、代々御室法親王や院の参詣の緒ともなったといわれる。

院政時代に入ると高野山の浄土観はますます広がりをもせ貴紳の参詣が続くが、その中であって画期的なできごととされる白河上皇の登山がある。白河上皇の登山参詣は寛治2年（1088）のことであったが、『栄華物語』の「紫野」段によると「雪など降りていと哀なりけり」と表現される冬の登山であった。上皇の霊場「高野山」への熱烈な崇敬の念は、徒歩による難渋な登山でありながらも物ともしなかったようである。この時の白河上皇の登山参詣では、三口の阿闍梨を高野山に置いて伝法灌頂を継ぐこと、一山の象徴である根本大塔を復興することを宣下され、その復興事業に教懷を中心とした山内在住の念仏聖30人を組織し、大塔再建観進活動が命じられた。また上皇は、観進を命じた三十口聖に対し、その供米として安芸国能美庄を施入された。この大塔再建は、15年の歳月を経て康和5年（1103）に完成した。白河上皇の御幸は、時あたかも復興の途上にあった一山に与えた効果は大きかった。

天治元年（1124）には鳥羽上皇も登山参詣された。鳥羽上皇は、その登山参詣において東塔・西塔の2塔を造立することを宣旨され、新たに別所聖人30人を組織され造立に当らせた。東塔は白河上皇御願で長者勝覚が、西塔は鳥羽上皇御願で越中守公能じやごうの成功によって建立された。大治2年（1127）10月、白河・鳥羽両上皇が揃って登山され東西両塔の落慶供養に臨まれた。鳥羽上皇が命じ組織された三十口の聖人にたいして、報奨として安芸国可部庄用途108石が寄進された。大塔再建、東西両塔の建立にみられるように観進聖は、高野山の復興に大きな役割を果たしたが、これら聖と呼ばれる人々の来山は11世紀に入ると徐々に増加をみ、高野山に聖達の止住地の別所が出来上がったようである。11世紀の中頃には南別所の名が文献に表れ、12世紀の初めごろにかけて小田原別所・東別所・往生院別所の各別所が成立し、高野聖の数が急速に増加したといわれる。高野山に止住した高野聖達は全国を遊行し高野浄土信仰の普及を行ったことから、高野浄土信仰はますます盛んとなって納骨や納髪、大師廟前への埋経も盛んに行われたようである。高野聖の活躍は、信仰面のみならず、財政面にも大きな貢献を果たしたのではないと思われる。

高野浄土観の浸透は貴紳の参詣を盛んにし、また私的な堂塔建立も盛んに行われることになった。藤

原道長の登山参詣以来、院政期に入っても藤原氏の登山参詣は盛んで、白河・鳥羽両院の供奉による参詣、私的な参詣が続けられた。また、康和元年（1099）の藤原師実による埋経など、代々藤原氏一族による大師廟前の埋経も続けられたようである。天仁元年（1108）には藤原雅実によって堀河天皇の御髪が大師廟前に埋納されるなど、納骨・納髪も盛んであったと考えられる。

堂塔の建立については、久安4年（1148）の藤原忠実発願による谷上金剛心院の建立、長者深覚の無量寿院、平等坊永巖の平等院、貫意の禅定院、覚法法親王の勝蓮花院、美福門院の菩提心院や六角経蔵など、貴族・僧侶・親王・女院による子院建立が盛んに行われ、山上に堂塔の薈が増していった。

高野山に堂塔の建立が続き、寄進荘園も増し安定期を迎えようとしていた高野山にも、世に風靡した末法思想と阿弥陀浄土信仰の影響が顕著に表れるようになった平安時代末期、永久2年（1114）に仁和寺出身の覚鑁が高野山に入った。覚鑁は華蔵院宮聖恵親王（白河院第5皇子）を通じて鳥羽上皇の信任を得た。覚鑁は鳥羽上皇御願寺として大治5年（1130）5月小伝法院を建立し、さらに長承元年（1132）大伝法院と密厳院の完成にともなう落慶供養に鳥羽上皇の臨席を得た。この時、鳥羽上皇より奥院・西塔料として安芸国沼庄を、伝法会料として石手・弘田・山東・岡田・山崎・相賀・志富田の7ヵ庄の寄進を受けた。このうち、相賀と志富田は『金剛峯寺根本縁起』に示されている寺領であったことから、本寺の金剛峯寺方の反感を買った。当初、大伝法院領が200余町であったが、保延2年（1136）に400余町、治承2年には大・小伝法院を合わせ1,500町にもおよび、仏餉人供料を合わせると2,726町となり金剛峯寺方の本寺を圧倒する勢力を示したため、より一層本寺の反目をつのらせることになった。さらに長承3年（1134）に鳥羽上皇の院宣によって、東寺長者による金剛峯寺座主職の兼務を排して、自から本寺と末院の座主職に就いたため、東寺・金剛峯寺方の強い反感を受けた。東寺と金剛峯寺方の有力者が鳥羽上皇に憤奏したため、保延2年（1136）両座主を同門の真誉に譲ったが、東寺長者定海の金剛峯寺座主職の復職などをめぐって紛争が続き、保延6年（1140）12月本末両派の合戦となった。この合戦に敗れた覚鑁は、院僧700余人とともに根来に逃れることになったが、真然大徳の時に行われた大伝法会を再興して教学を興隆し『五輪九字明秘釈』を著わして、密教と浄土教の理論的な折衷を試み、弥陀即大日、念仏即真言、極楽浄土即密厳浄土の思想を唱えるなど貢献した。

久安5年（1149）5月大塔に落雷し、御影堂を除く伽藍諸堂が類焼し烏有に帰した。ただちに参籠中の高野御室覚法法親王は復興を命じ、東寺長者寛信の奏上による幹旋などがあって平忠盛が成功により大塔建立奉行に任命された。忠盛の死後、清盛がこれを引き継ぎ大塔は保元元年（1156）に完成した。この頃、保元・平治の乱の余波を受けて、平治の乱の首謀者信西一族の勝賢や明遍が来山した。藤原敦光の子長光、清盛から遁れるために入山出家した宰相入道成頼なども来山止住した。また、歌人として有名な西行も来山した。安元元年（1175）五辻斎院頌子内親王は、鳥羽法皇追善のため東別所上乘院内に建立されていた談義所の蓮華乗院を治承元年（1177）3月壇上伽藍の地に移建するにあたり移建勧進奉行を勤め、また、治承4年（1180）には平清盛から高野山に命じられた紀州一之宮造営賦役の免除交渉に成功するなど活躍した。

平安末期には、本寺（金剛峯寺）と末院（大伝法院）との争いが絶えなかったようだが、大伝法院・蓮華乗院などの研究錬学機関が整い、覚鑁による大伝法院流の樹立、『十巻抄』の撰者で有名な保寿院流の永巖、永巖の流れをくむ心覚による『別尊雑記』の図像集の撰集などにみられるように、高野山での

密教事相・教相の研究が活発であった。

中興期の子院

中興期の高野山は復興と隆盛の歴史でもあったが、草創期にみられた密教修禪道場としての立場に霊場「高野山」の要素を加え、復興を果たした時期といえる。

『高野春秋』の正暦5年(994)秋7月6日の条によると、落雷により伽藍の諸堂が焼失した火災で「寺家類災本中院谷、南谷、及東別所は往生院峯際まで焼失」と古山史に言うとして塔頭寺院の類焼状況を記述している。この火災によって伽藍周辺に所在していた塔頭寺院の大半は焼失したものと思われるが、祈親上人定誓による再建の進展にともない、祈親上人の東室、行明の北室、興胤の西室等の再建、さらに中院流の祖である明算による中院の再興と徐々に塔頭寺院の再建が行われたようである。しかし、永承3年(1048)の藤原頼通の登山参詣の頃には、寺僧住坊16宇程度に過ぎなかったといわれる。

藤原道長などの摂関家や皇族など貴紳の参詣が盛んとなり、天下の霊場としての地位を確立していくにつれ貴紳の堂塔建立も相続いた。白河上皇による大塔・東塔、鳥羽上皇による西塔、大御室性信親王による奥院庵室・伽藍灌頂院、藤原忠実・頼長による金剛心院・南北二塔などの造営再興がそれである。さらに久安5年(1149)5月、大火によって御影堂を除く諸堂が烏有に帰した際にあっても、平忠盛・清盛の大塔再建造営が行われた。また、美福門院の六角経蔵・菩提心院、五辻斎院の蓮華乗院など、高野山浄土信仰が盛んになるにつれて堂塔伽藍の造営再興が続いた。

院や貴紳による寄進造営のほか、高野山来山止住僧などによる堂塔僧院の建立も盛んに行われた。深覚の無量寿院、平等坊永蔵の平等院、寛意の禅定院、覚法法親王の勝蓮華院、覚鑊の大伝法院・小伝法院・密厳院等の建立、明遍の蓮華三昧院、重源の新別所専修往生院などに代表される高野山隠遁者による山内各所に現われた別所の成立にともなう寺院建立も盛んであった。この別所は、11世紀後半に南別所が、12世紀に入ると中・小田原・五之室・千手院・東・往生院の各谷地域に成立し、12世紀中頃までにほぼ山内全域に塔頭寺院や別所寺院が建立され、現在の規模に匹敵するほどの状況になっていたらしいとされる。

3 継承・守勢期と子院

鎌倉時代に入っても、藤原基房・後鳥羽上皇・九条道家・後嵯峨天皇・後宇多天皇など天皇や貴族の参詣が続いたが、武士の参詣止住も著しくなった。源平の戦乱後の恩賞を不服として出家した佐々木高綱入道了智や同信綱(虚仮阿弥陀仏と称す)、熊谷直実蓮生房らが高野山に入った。

鎌倉時代初期の高野山には、守覚法親王や木工允友^{もくのりょう}時により平経正や平重衡の遺骨が奥院に納骨された。また、後白河上皇の命によって、平忠盛・清盛により再建された大塔で平氏怨霊追善法会が実施されるなど、平安時代末期に関係を持った平氏関係の菩提や追善が行われた。なお、平氏没官領の備後国太田庄を法華房鑊阿が後白河上皇に高野山へ寄進されるよう斡旋し成功するなど、鎌倉幕府体制への移行のなかで高野山の基盤強化も行われた。太田庄の寄進を斡旋した法華房鑊阿は、天野社に和泉国近木庄を寄進して法華八講を興し、打ち続いた戦乱犠牲者の無縁の尼60人を社頭の精舎に住まわせ、念仏や転経を勧めるなど慈善事業を行っている。すなわち、法華房鑊阿は、平安末期から鎌倉期にかけて活躍

した聖心・明遍・西行・重源・行勝・体阿弥・念阿・守覚・信助などの高野山勸進僧の一人でもあった。勸進僧の一人である行勝は、元暦元年（1184）ごろに大峯山から高野山に居を移した験者で、一心院谷に妙智坊・法智坊・蓮智坊・華智坊・経智坊の5坊を建立経営した。また行勝は、八条女院御願による不動堂を建立した。この行勝を慕って源頼朝の三男貞暁が来山し、自らも一心院谷に寂靜院を建立した。貞暁は高野法印・鎌倉法印と呼ばれ、隠然たる勢力を持っていたといわれている。

承久元年（1219）源実朝の室政子によって実朝の菩提を弔うために金剛三昧院が建立され、本尊の正観音胎内には実朝の遺骨が納められている。貞応2年（1223）には、多宝塔や経蔵が金剛三昧院境内に完成した。また貞暁が政子の援助を得て、3代將軍実朝追善のため阿弥陀堂と五輪塔3基を一心院谷に建立した。喜禎4年（1238）政子の13回忌に当り、足利義氏が金剛三昧院内に大仏殿を建立した。このような鎌倉幕府援助のもとで建立された金剛三昧院の初代長老には、栄西の弟子で幕府の崇敬を受けていた行勇が就任し、禅・律・密の三宗兼学の寺とした。このため金剛三昧院は、12代まで禅宗系の長老が代々住職を勤めた。高野山の建築に残る会下などの様式には禅院の名残があるのも、このころの僧院様式を伝えるものといわれる。

また鎌倉幕府は金剛三昧院のほかにも、弘安4年（1281）に勸学院・勸修院を創建して高野山の僧侶に修法と学問の奨励を行った。さらに安達泰盛の指導と援助で建長5年（1253）三教指帰に始まる高野版印刷事業が開始され、教学面のみならず高野山の文化の発展に大きく寄与した。泰盛は、遍照光院覚鑊の発願によって開始された平安時代以来の木造町率都婆を石造町率都婆に改めるために行われた勸進に対し、協力して勸進を行うなど高野山に大きな文化的足跡を残している。

金剛三昧院と鎌倉幕府・安達一族の間にみられる密接な関係は、他の子院と武士との関係を深めることになったようで、深覚の開基とされる無量寿院と牧氏、遍照光院と仁科氏など地方武士と高野山子院との間に師檀関係が成立して、堂塔や子院建立が行われ宿坊制度の原型が出来上がったと言われる。

天皇や貴族のあいだにも、平安後期に引き続き参詣や堂塔の建立がみられる。堂塔の建立としては、正治2年（1200）後鳥羽上皇御願により伽藍内に孔雀堂が、承久3年（1221）には道助法親王により光台院がそれぞれ建立されているが、平安時代後期にみられた皇族や貴族により建立された堂塔住坊の数とは比較にならないものであって、むしろ武士階層による堂塔建立が著しかった。

一方、新別所専修往生院で行われていた重源の二十四蓮社友による不断念仏を範として、建保4年（1216）に往生院の二十五三昧講が成立し、明遍の蓮花谷聖や覚心系の萱堂聖、千手院聖、五室聖など、それぞれの谷に特色のある聖集団が成立し、その活動も活発化した。しかし、これら聖集団の多くは、建治元年（1275）に一遍上人他阿が千手院に止住して以来上人の影響を受け、南北朝以降には時宗化が進行したとされる。

これに対して高野山本来の密教教学は、鎌倉時代の初期に学僧の覚海が正統的な密教教学の復興を企てた。その覚海の門下に法性・道範・尚祚・真弁が出た。この4名の学僧は、覚和・信日・信堅・玄海などの学僧と共に高野八傑と称されるなど、密教学道も活発化した。

鎌倉時代の高野山の発展に最大の貢献をした足達一族が平頼綱と争った霜月騒動で失脚し、やがて後嵯峨天皇の譲位後、大覚寺統（南朝）と持明院統（北朝）との分裂、後醍醐天皇の倒幕挙兵、鎌倉幕府の滅亡という政治の流れを経て、政治的社会的動乱の時期である南北朝時代を高野山は迎える。

当時、一大勢力を持っていた高野山は南北朝の双方から挙兵などの誘いを受け、政治的な選択を迫られた時代でもある。南朝の後醍醐天皇は、鎌倉時代以来教学が盛行していた高野山に、長日談義の新学堂（愛染堂）を建立した。また不断愛染護摩供を始行されたり、延元3年（1338）に来山された際には『金剛峯寺根本縁起』に御手印を押して寺領の保証を行い、大塔料の太田庄、蓮華乗院の南部庄の安堵を通知している。一方、北朝方においても高野山に対し、光厳院が高野山の旧領を安堵した。また、足利尊氏も寺領に対して段銭や諸役の免除、守護不入の権利を高野山に与えるなど、両勢力の背後に政治的意図のある甘言や懐柔策を行っている。このような両勢力の誘いに対し、正平3年（1348）3月、衆徒520名が連署して、南北両勢力のいずれにも荷担せず出兵もしないこと、寺領を侵す者には南北両勢力を問わず一致協力して放逐するという決議を行い中立の原則を貫いた。

また南北朝の動乱期は、高野山の経済的な面にも動揺をきたした時代でもある。高野山の遠隔地の大庄園が守護地頭などに度々押領され、紛争が絶えず、徐々に収入が減少していった。高野山はこの減収に対する策として寺領有力者の子弟を出家させ寺領の治安維持を計る一方、大内氏と成慶院、足利氏と安養院、南部氏と遍照光院というように有力守護と高野山の寺院が宿坊契約や師檀関係を結ぶなど積極的対策も講じられた。このような事情を裏付けるように、『金剛峯寺衆徒契状』には、契約に違反して旅人引き（客引き）をする者には罰を加え、宿坊を破却することを取り決めている。

このように南北朝動乱期における高野山は、政治的・経済的に諸方策がとられて一山の安泰が計られた。南北朝時代の高野山は、後醍醐天皇の愛染堂建立以外に注目すべき堂塔の建立は記録に表れないが、塔頭子院が有力守護などと宿坊契約や師檀関係が結ばれたことから、子院の規模の拡張などがあった可能性もあるが明確ではない。

南北朝時代の高野山の教学や信仰は鎌倉時代の活発化を受け継ぎ、後醍醐天皇の勅願によって創建された新学堂（愛染堂）に20人の学道衆と5人の権学衆が置かれ、蓮華乗院の本会と勸学院の勸学会などの機関に、新たな密教学道研究機関が加わり教学の盛行をみた。不二門思想を説いた長覚や而二門思想を唱えた宥快が出て、密教本来の立場から密教教学の復興を唱え、やがてこの運動は室町時代初期の応永の大成という高野山密教教学や学道組織の確立に繋がっていった。一方、鎌倉時代に組織化が進んだ高野聖集団は、鎌倉時代後期の一遍上人の来山によって時宗化が進み、南北朝時代には時宗化の傾向が加速し、口称念仏の声は全山に響き渡るほどになっていった。

室町時代の高野山は、足利義満や義持などが足利尊氏の参詣を前例としたことにより、代々の将軍が参詣した。その際には『金剛峯寺根本縁起』や“飛行三鈷”の拝観が行われ、根本縁起記載の旧領安堵の再確認を幕府に求めるなど寺領の保護に努力が払われた。やがて室町幕府の権勢が衰え、各地に戦国大名が割拠したいわゆる戦国時代には、遠隔地の高野山の庄園は実質的に崩壊した。高野山は各地の有力大名や豪商富豪と宿坊契約や師檀契約を結び、経済的維持が計られた。このような宿坊契約や師檀契約は、寺僧や高野聖などの廻国廻国によって緊密に結ばれた。寺僧や高野聖の廻国などの行動範囲の拡大は、奥院への納骨や供養碑の勧進活動を活発化させ、奥院の建碑の中でも30cm程の一石五輪塔がこのころから極めて多くなるのも、このような背景があつてのことだと考えられる。

南北朝時代から密教以外の思想を排除し、密教思想本来の教学を求めて長覚や宥快を中心に進められてきた教学運動は、室町時代初期の応永14年（1407）南都より研学堅義を移入して山王院に堅精大義を

興し、蓮華乗院・勸学院の学道組織が改められるなど、教学の確立を計った応永の大成が行われ、教学の黄金時代が築かれた。

このような教学の隆盛によって、一山を念仏の山と化す程の勢いであった時宗化した聖達に対し、応永20年（1413）高野五番衆契状により、高野山での高声念仏・金叩き・眞頭陀・踊念仏・庵室の新造禁止などの処置がとられている。

聖の勢力拡張によって庵室の建築が盛んであったようであるが、堂塔の目立った建立はみられなかったようである。しかし、応永18年（1411）に堺の草部屋道普が金堂と奥院御廟の上葺を行い、また同21年には大塔下層の上葺を行っている。また文明2年（1470）十穀是吉によって奥院御廟の修理を行うなど、維持管理の寄進行為が豪商などの手によって行われた。

宿坊関係はさらに広範囲に普及し、正長元年（1428）に千葉胤直と蓮華三昧院、永享11年（1439）松平親氏と蓮花院（大徳院）、古川公方と桜池院が契約を結んでいる。天文22年（1553）には上杉謙信が無量光院清胤に帰依するなど、室町時代後半には、高野山との間に一族や家臣団、領国全体を単位とした宿坊契約が結ばれたといわれる。

またこのころ、諸堂の維持管理・年貢の徴収・出納事務を代行して経済を掌握していた行人と学侶の間でしばしば紛争が生じ、永享5年（1433）には学侶の要請で登山した守護代遊佐越前守と行人方との間で合戦が起こり、『検校帳』によると山上の大半が焼失したとされる。

永正18年（1521）2月に西院谷の寺院から出火し壇上加藍、南谷の北半分、本中院・小田原・千手院・往生院の各谷の堂塔・経蔵など1宇も余さず烏有に帰した。そのために阿本や阿純が復興のため勧進活動に着手したが、天文3年（1534）の弘法大師700年御遠忌に僅かに御影堂が急造されたに留まるなど衰退を極めた。

継承・守勢期の子院

鎌倉時代の高野山の堂塔建立は、正治2年（1200）後鳥羽上皇御願による伽藍境内に建立された孔雀堂、建久9年（1198）八条女院御願による不動堂、承久3年（1221）道助法親王による光台院建立、元暦元年（1184）以降に建立された一心院谷の5坊、源頼朝の三男貞暁による寂靜院の建立がある。この時代で最も注目されるのが北条政子による貞応2年（1223）の金剛三昧院建立、弘安4年（1281）の北条時宗による勸学院建立などにみられる鎌倉幕府の影響下による寺院建立である。鎌倉幕府は、この金剛三昧院を中心として高野版の開版、教学の奨励を行うなど高野山の文化振興の促進を果たし、高野山に大きな足跡を残した。

鎌倉幕府と金剛三昧院の関係は、地方武士と塔頭寺院との間に師檀関係を生むこととなり、堂塔や子院建立が行われた。また鎌倉時代には聖集団の組織化が進み、各谷に特色のある聖集団が成立し、庵室などの建立も盛んになったものとみられる。

南北朝時代は南北朝の対立の影響を受けて、高野山は守勢期でもあって、後醍醐天皇による新学堂（愛染堂）の建立はあったが目立った寺院建立はみられなかったようである。しかし、塔頭寺院は、有力守護との間で宿坊契約や師檀関係を結ぶようになり、経営維持が計られた。

室町時代に入ると、遠隔地の庄園が実質的には崩壊することになったことから、各地の有力大名や豪

商富豪と宿坊契約を結ぶなど塔頭寺院の維持を計るとともに、寺僧や高野聖の廻国による勧進活動が活発化し安定化が計られた。このころには時宗化した聖による新造の庵室などが建立されることが多かったようで、庵室などで行われた高声念仏や誦念仏などの禁止とともに庵室の新造が禁止されている。また豪商や富豪による堂塔の修理が行われたことも注目されよう。

宿坊関係も、寺僧や聖の廻国の強化によって有力戦国大名との間で広範囲に結ばれるなど普及した。しかし、行人と学侶間の争いが絶えず、紛争が原因で山上の諸坊が焼失したり、失火によって山上の寺院堂塔が広範囲にわたり焼失するなど、その末期には衰退を極めた。

4 変換期と子院

高野山の近世の幕開けは、織田信長による高野攻めに始まる。織田信長は永禄11年（1586）に入洛し、元亀2年（1571）に延暦寺の焼打ちを行うなど天下統一に対抗する勢力に対し容赦ない攻撃を加えた。高野山の衆徒が天正元年（1573）に紀和の国境に要害を構えたため、信長がその撤去を命じたが高野山側が拒否したことや、天正8年（1580）に荒木村重の家臣が師檀関係を頼って高野山に逃れたため、捜査に登山した松井友閑の部下32人を饗応にことよせて殺したため、信長は諸国の高野聖1,383名を安土城外・京の七条河原・伊勢蛛津河原で斬殺し高野攻めを開始したが、本能寺の変によって挫折した。

信長に代わって政権を握った豊臣秀吉は、天正13年（1585）3月根来寺を攻略して高野山に迫った。この秀吉の高野攻めから高野山を救ったのは、天正元年以来通世し高野山に入山していた木食応其であった。応其は高野山の代表として秀吉と面会し、応其の努力によって和平が成立し、高野山は兵火から救われた。しかし秀吉は高野山寺領のすべてを没収し、後に21,000石を高野山に与えた。以降、交渉に当たった応其は秀吉の信頼を得、高野山に応其上人のために客僧坊興山寺を建立している。また秀吉は母天瑞寺殿追善のため青巖寺を建立している。さらに、秀吉は応其に命じて室町時代の大火で焼失していた大塔や金堂など25棟の堂塔の再建を行った。秀吉の亡き後も、豊臣家と高野山は応其を介して強い関係を維持していたようで、後に関ヶ原の戦いで西軍の将として徳川家康と戦い敗れた石田三成が、慶長4年（1599）に悲母追悼のため奥院に経蔵を造立して高麗版一切経を納めている。慶長5年（1600）関ヶ原の戦いでの西軍の敗戦によって、応其は高野山への危害を恐れ江州飯道寺に逃れて一生を終えた。

徳川家康が天下を奪取した江戸時代に入っても、秀吉が高野山に与えた寺領21,000石は引き続き安堵されることになったが、江戸時代の高野山は幕府の峻厳な規制を受けることになった。また高野山にあって学侶・行人・聖の三派がそれぞれ勢力争いを繰り返したことから、幕府はこの3派の争いを利用して高野山を巧みに統制したといわれる。慶長11年（1606）家康は時宗化した聖方に対し、聖方の36道場を新言宗に帰入するよう命じた。家康が没した後、学侶方（青巖寺）・行人方（興山寺）・聖方（大徳院）が幕府を意識して家康の木像や東照宮を建立するなど互いに張り合った。

寛永7年（1630）10月、大塔に落雷炎上し、五社拝殿・六角経蔵・中門を除く伽藍諸堂と本中院谷・小田原谷・青巖寺・宝性院の堂宇が焼失した。

寛永15年（1638）無量寿院主澄栄が、行人が受ける資格のない堂上灌頂を行人の応昌に授ける約束をしたが、学侶の反対で澄栄の約束が二転三転したため、行人2,500人は学侶と絶交し、学侶に対抗して行人側が、大塔棟札を心柱に打ったことが問題となり、翌年学侶方が幕府に訴える堂上灌頂の争いが生じ

た。学侶・行人の争いは双方が幕府に訴え、その裁定を仰ぐという形で何回となく争いが続き、元禄5年(1692)幕府の裁断に服従しなかった行人627名を流罪335名を山外追放とし、翌6年10月行人寺902軒を取り潰し280軒だけを存続させた、いわゆる元禄聖裁まで約半世紀にわたって続いた。この聖裁によって、正保元年(1644)ごろには学侶坊210軒、行人坊1,440軒、客僧坊42軒など合計1,865カ寺あった塔頭子院数は、行人寺902軒が取り潰されたことにより計963軒となった。この元禄ごろから山内に店舗が設けられ、現在の町家発生の因となった。

文化6年(1809)7月、南谷から出火し、中門・六角経蔵・鐘楼・愛染堂・三昧堂・蓮華乗院・東塔・勸学院等が類焼した。さらに、天保14年(1843)にも火災が発生し、御影堂・灌頂堂・大塔・金堂・鐘楼・孔雀堂・准胝堂・山王院・同鐘楼・荒川経蔵・中門・蓮華乗院・三昧堂・愛染堂などの伽藍諸堂がことごとく焼失した。万延元年(1860)の大火では青巖寺も焼失した。

江戸時代にも高野山は幕府や諸大名と宿坊関係を結び、関係大名を通じて文人や絵師の登山が多くなり、塔頭寺院に障壁画などを残している。また、これら師檀関係を基に各大名は奥院に巨大な五輪塔供養碑などの建碑を行っている。塔頭寺院と大名の師檀関係によって、幾度も発生した火災での焼失による危機に対し、大名から塔頭寺院に援助の手が差し伸べられたものと思われ、再建も順調に行われたようである。

慶応4年(1868)3月の王政復古により、9月には明治と改元された。高野山では学侶・行人・聖の三流を廃し、青巖寺と興山寺を一本化し金剛峯寺とした。明治4年(1871)の土地令によって21,000石を返還し、加えて3,000ヘクタールの山林を返上したことから、千年にわたる宗教教団は生活の糧を失った。明治17年(1884)13の字から成る高野村が誕生し、明治5年の女人禁制の解除とともに高野山は近代化に向けて歩むことになった。当時の高野山は寺院436軒、人口772人であった。明治初年には680カ寺が現存していたが、財政の窮乏のため山内寺院の整理統合が急務であった。明治21年(1888)3月23日に発生した火災によって五之室谷・千手院谷・小田原谷・蓮華谷で寺院77軒、町家70余戸が焼失した。このため明治24年(1891)一山が協議し130カ寺を残し、他を廃寺とした。大正2年(1913)には宝性院と無量寿院を合併し宝寿院と改称した。昭和元年(1926)金堂から出火し、孔雀堂・六角経蔵が焼失した。この時金堂内陣の諸尊像がことごとく焼失し、弘法大師空海ゆかりの仏像が高野山から姿を消したことは惜しみても余りある惨事であった。

昭和7年(1932)9月には金堂が再建され、昭和9年(1934)には宗祖1,100年御遠忌が執行され、昭和12年(1937)には大塔が完成した。昭和21年(1946)1月には高野山新言宗が設立された。昭和40年(1965)には高野山開創1,500年記念大法会が、昭和48年(1973)には宗祖生誕1,200年記念大法会が、昭和59年(1984)には宗祖御入定1,150年御遠忌記念大法会がそれぞれ執行され、平成2年9月には高野山の基礎を確立した伝灯国師真然大徳1,100年御遠忌大法会を迎えようとしている。

変転期の子院

室町時代末期の永正18年(1521)の火災によって焼失した塔頭寺院が十分に復興をみていなかったと思われる時期に、織田信長・豊臣秀吉による高野攻めがあり、山内の塔頭寺院の復興も遅れがちであったと考えられる。安土桃山時代にはいかほどの寺院が存在していたかは不明である。しかし秀吉の天下

統一が実現した桃山時代に入ると、秀吉の信任を得た木食応其の力もあってか、客僧坊興山寺や青巖寺が秀吉によって建立された。さらに秀吉は、永正18年の火災で焼失した大塔や金堂など25棟の堂塔の再建を行うなど復興も順調に進展をみたものと考えられる。秀吉の亡き後も、応其を介して豊臣家との関係が維持されたようで、関ヶ原の合戦前年に石田三成が奥院に経蔵を建立している。

江戸時代に入ると、金剛峯寺は徳川幕府の峻厳な規制を受けることになったが、正和3年（1646）の『御公儀差上一山図』裏書によれば、学侶坊210軒、行人坊1,440軒、非事吏坊120軒、客僧坊42軒、三口聖坊52軒、総計1,864軒の塔頭寺院が存在していた。しかし、学侶と行人の紛争が続き、「元禄聖裁」が下され、その聖裁によって元禄6年（1693）には行人方寺院902軒が取り壊されている。

江戸時代後期には、文化6年（1809）、天保14年（1843）、万延元年（1860）と伽藍地区を中心に大火が続いた。この火災によって焼失した伽藍大塔は、昭和12年（1937）に至るまで復興されることはなかった。塔頭寺院にあっても、火災焼失の憂き目を受けた寺院もあったが、大名と宿坊契約に基づく大名からの援助もあって再建も順調に行われたようである。しかし、小坊にあっては再建されなかった寺院も多かった。

明治維新の風が吹き荒れた明治時代初期に現存していた塔頭寺院は436軒と江戸時代前期の正保元年（1644）ごろの1,865寺に比べ激減している。

明治維新による体制の大変革は、高野山にも大きな波として押し寄せ、学侶・行人・聖3派を廃し、青巖寺と興山寺の合併、上地令による21,000石の寺領返還や3,000ヘクタールの山林の返上にとともに宗教教団の生活の糧を失うなど基盤が大きく揺らいだ。この経済的窮乏は、山内寺院の整理統合を急務の課題とした。そのような状況下の明治21年（1888）、五之室谷の寺院から出火し寺院77軒と町家70余戸が焼失した。この火災がもとで、明治24年（1891）に焼失を免れた359軒の寺院を統廃合して130軒を残し、他を廃寺とする処置が取られた。この統廃合は、現在の大師教会の地にあった宝性院を谷上の無量寿院と合併し、宝寿院と改称して作業は終了した。

大正時代に入るとようやく復興の兆しがみられ、大正10年（1921）に高野山の宝物を保管し陳列公開する施設として、高野山霊宝館が勸学院前の南谷の一画に開設された。復興の途次にあった高野山に、昭和元年（1926）金堂から出火し孔雀堂・六角経蔵が焼失するという惨事が襲った。

昭和9年（1934）宗祖1,100年御遠忌大法会を迎えるに当たり、各方面の寄進を受け昭和7年（1932）に金堂が再建され、御遠忌法会後の昭和12年（1937）大塔が再建された。昭和59年（1984）の宗祖御入定1,150年御遠忌大法会の記念事業として孔雀堂や東塔が再建された。現在、高野山内には117カ寺を有し、その内全国の檀信徒の宿泊所として53カ寺の宿坊寺院が存在し、弘法大師空海が真言密教の修禪道場として開創された弘仁7年（816）以来12世紀余の歴史の変転を過ごしながらも、脈々とその法灯を伝えている。

参考文献

- 1 「紀伊名所図絵」歴史図書社復刻 1970
- 2 「紀伊続風土記」巖南堂復刻 1975
- 3 財団法人元興寺文化財研究所「高野山発掘調査報告書」1982
- 4 日本歴史地名大系第31巻「和歌山県の地名」平凡社 1983
- 5 日野西真定「高野山古絵図集成」1983
- 6 安藤精一編「和歌山県の文化財」第1巻 1983
- 7 兵庫県教育委員会「魚住古窯群」兵庫県文化財調査報告書第19集 1983
- 8 堺市教育委員会「堺市文化財調査報告第13集」1983
- 9 九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」1984
- 10 和多秀乗「高野山の歴史と信仰」『高野山』法蔵選書27 1984
- 11 角川日本地名大辞典 30「和歌山県」1985
- 12 財団法人高野山文化財保存会「重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書」1986
- 13 図説日本の歴史 30「図説和歌山県の歴史」1988
- 14 財団法人和歌山県文化財センター「(財)和歌山県文化財センター年報1987」1988
- 15 和歌山県教育委員会「伊都地方広域遺跡群詳細分布調査概報」広域遺跡群詳細分布調査 3 1989